

島からの手紙

北原文雄

目次

I 島からの手紙

目黒の孤影 9

島の春・小諸の春 13

海を超える 17

橋を渡る 19

島人の嘆き 21

「島の春」と、その前後 23

あとがき 57

新装版あとがき 61

初
出
一
覽

63

目黒の孤影

大学を出て十年以上も経っていたであろうか。山手線目黒駅に降り立った。夏の夕刻近かった。駅前広場を歩きだしたとき、背筋はすつくと伸ばしているが、片方の肩をやや落とした細身の小田切先生にはったり出会った。

「やあ、君は淡路島の……」

わたしの名前まで覚えていらっしやう。近くの喫茶店にはいった。「ルノアール」だったと記憶する。数年前『島の構図』という拙著をお送りしたり、同人誌『文芸淡路』を発行するたびにお送りしていたが、先生に記憶されるほど別なる恩義があった。

「その後もお元気のようで、よかったですね。作品はいつも拝見しています。よく頑張っていますね。高校の教師がよかったのでしょ」

喫茶店の椅子に座って、そういつて先生は温かいまなざしをわたしに向けた。

「その節はお世話になりました」

わたしはすぐに、お辞儀をした。先生があのことを思い出したのだと感じた。二度目の四年生のとき、農業をやりながら卒論を書こうと島へ帰った。提出締切日に上京するつもりだったが、海が大時化で、船が欠航してしまった。四月から高校へ就職が内定していた。慌てたわたしは小田切先生に電話を入れた。

「欠航証明をつけて出しなさい。小原君にもよく頼んでおくように。教授会でぼくの発言を援護してもらるように」

小原元先生がわたしの媒酌人であることを、小田切先生はご存じだった。なんとか卒業をとりはからってくださいました。

コーヒーを飲みながら、学生時代と変わらぬ、教え子と話をするのが大好きな先生の姿が印象的だった。といってもこちらは先生のご高説をうかがうばかりであるが。喫茶店を出て、夕日をあびながら、目黒駅に向かってなだらかな坂道を、ゆっくりと歩いて行かれる先生の孤影をお見送りした。そのときわたしには、なぜか「目黒の先生」ということばが思い浮かんだ。

それから数年して、作品集『田植え舞』を出版するとき、帯に推薦文を書いていただいた。そのうち合せて上京したときも目黒でお会いした。先生の行きつけの喫茶店だった。小原先生の新宿での十周忌以来だった。

「妻が病気でなかったら、家に来てもらうのだが、いま無菌状態を保っているのです。ほかは妻になんども命を救ってもらったから、いまは妻にできるかぎりのことをしようと思つて、雑誌の原稿執筆も抑えているのです」

学生にたいし、まじめでやさしい対応をなさる先生は、奥様にたいするいつくしみも強かった。厳しい論陣をはる場合もあるが、基本的に人間と文学にやさしいまなざしをもつていらつしやるかたである。推薦の帯を書いていただいたお礼に、鳥の名産「そうめん」と「鳴門漬け」と図書券をお送りした。

そうめんと鳴門漬けはよるこんでくださった。鳴門漬けは小さく切つて、少量ずつ味わいながらいただいていますと手紙にあつた。ただ、図書券は同封されて返された。「あなたからいただいた金額の多少のためにお返しするものではありません。わたしの学生から、お礼はいっさい受け取らないことにしています。誤解のないように」と書き添えられていた。わたしは熱いものを感じた。マンモス大学で小田切先生や小原先生のようなかたに巡り合つて、終生おつき合ひさせていただける幸せを思った。

推薦の帯を書いていただける約束をしてくださつた日、驟雨があつた。喫茶店のガラ又越しにはげしい雨滴が見えた。一時間ほどで空は晴れた。喫茶店を出て、坂道をくだつていく先生をお見送りした。雨あがりのさわやかな坂道を、ゆっくりと歩む先生の矍鑠とした背影に、孤高の姿を見る思いがした。目黒の先生という思いをいっそう強くした。

帰島して「目黒残影」という詩を書いた。

『田植え舞』で農民文学賞を頂戴したとき、先生はたいへんよろこんでくださった。阪神淡路大震災のおりは、テレビを観ていてあまりにひどいので、続けて二回もお見舞状をいただいた。その年の春、「小田切先生を囲む会」のとき、先生はわたしに震災の報告をなさいと、ご自身のご講話の時間を二十分も割いてくださった。

高校時代に、小田切先生のご講話を受けた教師から、『万葉の伝統』や『文学と政治』などの本を借りて読んだ。高校を卒業すると父との約束で地元の銀行へ就職した。銀行員二年目の夏、小田切先生が中心となって『文学的立場』を創刊された。さっそく定期講読を書店に申し込んだ。

そのころわたしは銀行の仕事に疎外感を覚え、小説を書きたいと思うようになっていた。わたしの最初の小説「島ひとり」を書いたのはこのころである。文学をやるなら東京だ、小田切先生のもとへ行こうと退社して、翌年三月に上京した。当時先生は総長代行だった。先生の声を聞こうと、入学式場の武道館へ出かけた。まだ四十代の若々しい先生が壇上にいらした。以来三十五年、よき師に就けた幸せな出会いに、生涯の至福を覚えている。

『小田切秀雄全集・別巻』2000（平12）年11月20日

島の春・小諸の春

小諸の懐古園の桜は、すでに名残をとどめていないだろう。二年前のゴールデンウィークに、小諸在住の友人の案内で、信州に遊んだ。道路を覆うように咲く諏訪街道の桜は、まさに桜隧道すずいどうだった。高遠の桜は見事としかいいようがない。今も三箇所の桜がまぶたに浮かぶ。

小諸には学生時代に繊細な詩を書いていた友人のH君が住まいしている。長い間、会う機会を逸していたが、わたしがささやかな文学賞を受賞した祝賀会に、わざわざ長野から出席してくれた。その翌年、お返しの意味もあって、彼に誘われるままに、久しぶりに小諸を訪れた。職場の旅行などで、信州へはときどき訪れているが、マイカーでの案内ははじめてのことだった。

三十年前にもH君の小諸の実家を訪ねたことがある。東京から、夏休みの帰省の途中、

いつも使っていた東海道線ではなく、中央線で帰り、小諸に立ち寄った。当時、H君もわたしも車の運転をしなかった。千曲川の河原で遊び、信州の山並みを眺め、城跡で藤村の気分にはたつた。今ほど観光化していなかった。

信州の春が、あんなにもいつせいに訪れるとは知らなかった。温暖な淡路島では、二月の山茶花の終わりごろにシシガシラ・寒椿が咲き、一月に水仙が咲きはじめ、寒菊と同居する。二月の梅が咲きはじめると、ヨモギ・ハコベが萌えはじめ、ツクシが芽吹くのを待つように、紅い桃の花が目にとまる。木々の新芽の緑が鮮やかになっていく三月下旬から四月初旬にかけて、桜のシーズンとなる。

友人のH君に案内してもらった年は、島では珍しく桜の花が四月二十日近くまであった。四月末に信州へ行ったのだが、まだ桜が満開で、H君の庭先には梅と桃の花が同居し、タンポポ、スミレ、ネコヤナギなどがいつせいに芽吹いていた。雪国の春はこんなにも時を同じくして訪れるものかと、信州の春に感動したものだ。

今度はH君を島へ迎え、案内したい。今、明石海峡大橋が架かって、島は観光客であふれている。道路は渋滞していて、車で予定通り走るのが困難な日がある。路線バスも神戸三宮から洲本へ一時間二十分の予定が、渋滞で三時間も四時間もかかることがある。神戸から洲本へ、船の時代は一時間十五分と決まっていたが、船が無くなり、頼りが明石海峡大橋だけになると、お客を迎える予定がままならない。阪神間の会合へ出るにも、

今はまったく時間のめどが立たない状態である。

高遠への車の渋滞に慣れている信州人なら辛抱できるかもしれないが、短気な関西人には無理である。とりわけせつかちの多い淡路人には、大橋開通以来の道路渋滞は、それこそ「国生み」以来の忿懣かんまんやるかたない体験である。

H君を歓迎するには、大橋開通のもの珍しさが沈静化する来春以降がよからうと思っている。本年一月に火災で失った居宅も、そのころには、ささやかながら再建できていることであろう。自然の巡りは穏やかで、例年よりも早い春の訪れだったが、今年の島の春は、公私ともに慌ただしく過ぎようとしている。

『信濃毎日新聞』1998（平10）年5月23日

海を超える

島の少年にとって、いつの日か海を超えろということとは、大きな夢であった。海の向こうには、未知の輝ける世界があると信じていた。海は超えなければならぬハードルのひとつでもあった。わたしにとっても例外ではなかった。

高校時代、洲本の城山に、読みもしない本を抱えてよく登った。城山の展望台から、洲本の街が一望できる。大阪湾が広がり、紀淡海峡がまばゆく洗っている。天気の良い日には、島の海岸線がくつきりと見え、泉州から大阪方面、神戸方面がうっすらと望めた。そのころ洲本から神戸へ三時間近くかかる船が出ていた。まだ、一人で神戸へ行ったことがなかった。神戸航路を走る船を見ては、「いつの日か海を超えるぞ」という熱い思いを募らせたものだった。

時代は変わり、一時間余りで神戸へ行ける高速艇が就航し、ことあるごとにこの船の

世話になった。神戸港二十一時四十五分発最終便は、阪神間の会合に出席して、帰るときに専用便だった。明石海峡大橋が一般供与される前日の四月四日、『兵庫県地下文脈大系』の出版記念会があった。この日も最終便に乗った。明日からこの船が無くなる。よく馴染んだ船だけに、思いは複雑だった。

少年期の夢を託し、成年期に入ってから、神戸・大阪へ出張や会合に出るたびに使った船である。海を眺め、束の間の船旅を楽しんだ。お酒の会があっても、洲本港にはタクシーが待っていた。妻に迎えに来てもらっても、近くて便利だった。明日の夕刻から廃便となる。代替のバスの便は悪い。車に乗るのが億劫なわたしにとって、これからはいかなる方法で島の外へ出ようかと迷っている。

それよりも、「海を超える」という、島の若者にとっての夢は、どのようになっていくのだろうか。明石海峡大橋が完成し、島の内外ともに祝賀ムードである。都会と橋で繋がりに、孤島でなくなった島の少年・少女にとって、「橋を渡る」ことが夢になるのだろうか。

『神戸新聞』1998（平10）年5月21日

橋を渡る

島の子どもたちが大学へ進むには、島を離れ、親元を離れて暮らさなくてはならない。島のなかに無いのだからいたしかたない。息子や娘が島を出ると、卒業してもなかなか島へは帰ってこない。都会でそのまま就職してしまうことが多い。我が家も同様である。今年の春で、子どもたちのいない、妻と二人きりの生活が六年になった。

二十五年ほど前、わたしたち夫婦が、さんさん悩んだ末に、島の生家に落ち着いた。子どもたちが島へもどらないのは、止むを得ないことと諦めていた。老後を妻と一人で暮らしていく練習を、この六年間していったといってよい。が、どついう風の吹きまわしか、娘がこの春から島へ帰った。

わたしは車の運転が苦手である。島のなかでは必要最小限度の運転を、何とかやっているが、島外では運転をしたことがない。旅に出るのも、船と電車とタクシーを使う。車

の運転をして走りまわるのは、どうも性にあわない。船や電車に乗って、缶ビールでも開けると、旅のはじまりを感じる。非日常への解放感を覚えるのである。

明石海峡大橋が開通して一か月経っても、車で大橋を渡っていなかった。家族で一度神戸へ食事に行こうかということになったが、運転をだれがするか問題だった。妻の運転はわたしよりも危なっかしい。ところが、娘は京都でも大阪でもよく車に乗っていたという。島内より安全だという。娘の運転に任せることにした。

ある日曜日の午後、洲本ICから入って、島がよく眺められる垂水の海岸線のレストランへ行った。娘は平気で淡路自動車道を走り、明石海峡大橋を渡った。隣や前の車に遅れることもなく、実に楽々と運転をしている。四十五分でレストランへ着いた。はじめて橋を渡った。神戸がこんなに近いとは驚きである。レストランの窓から、北淡路の丘陵が間近に見えた。

娘の運転で島外へドライブをして、食事に出掛けて行くような生活は、想像さえしていなかった。車で走る恐さよりも、橋を渡ったもの珍しさよりも、子どもと同居するということは、こういうこともあるのだと、内心にんまりとしていた。

島人の嘆き

明石架橋が開通して、斜陽気味だった島への観光客が急増している。昨年比二・五倍という好調ぶりである。震災以降経営が苦しかった島のホテル・旅館は、一息ついている。年間三十万人の来館者を想定していた「野島断層保存館」も、一か月でそれを突破し、渦潮観光や淡路七福神へは、連日貸切バスが押し寄せている。淡路サービスイリアの大橋展望は、平日でもお祭り騒ぎである。

だが、嘆きも多い。島は今、玉葱の取り入れを終え、田植えのシーズンである。道路端に直接面する田圃や土手に、空缶のポイ捨てが溢れ、拾い集めるのに一苦労である。浜辺には観光客が持ち帰らないゴミの山である。

今まで気軽に使っていたホテルが、満室で会食の予約ができない。安い料金で一流ホテルを使っていたのだから、島人は驚沢だったとはいえ、はなはだ便利が悪い。また、高

速路線バスの便が曖昧である。

こんなことがあった。ある同窓会が洲本のホテルで開かれた。大阪在住のB君は、三宮発十一時十五分で洲本着十二時三十五分予定のバスに乗った。洲本で軽く食事をして行こうと思っていたが、渋滞でやっと会場へ辿り着いたときには、十六時三十分の閉会セレモニーがはじまっていた。島内在住者も車の渋滞に巻き込まれ、参加が大幅に遅れ、開会前の記念撮影に入れない者が出た。船の時代には考えられないことである。

連休を除くと、バスの便は安定してきたが、まだ積み残しがある。高速バス停の駐車場はどれも小さく、バス利用に不便である。洲本以北の住人は、満車でバスが停留所に止まらないことが度々あつて、阪神間へ出る時間の計算ができないと嘆いている。

神戸から終夜運航の船がなくなった。シャトルバスが三宮から出て、深夜でも島へ帰れると思っていたが、予想外れに終わった。このままでは、やがてバス利用が減少するだろう。そうなると各バス会社は運行を縮小する。そのとき車を運転しない者にとって、島は不便な孤島となってしまう。

『神戸新聞』 1998（平成10）年6月20日

「島の春」と、その前後

なまけもの

昨年『日本農業新聞』に一年間、小説「島の春」を連載した。勤務をしながらの新聞連載小説の執筆は少々疲れた。そこへ居宅焼失と再建が同時期に重なった。昨年暮れに最終原稿を送って、ほっとしたら生来のなまけものにもどった。とはいえなまけものには、よくぞやり遂げたと誉めてやりたいくらいである。そんなわけで、連載執筆の終わった今年は、いたってなまけものに徹している。

五月半ばに『農民文学』編集長の堀江泰紹さんから、書き残したこともあるでしょうから、「連載を終えて」のエッセイを送れとの連絡があった。数枚の原稿くらいは即日書けるはずなのに、なまけもの意識は続いていた。中間考査の採点に追われていた。父の

三十三回忌法要兼いとこ会を下旬に予定していた。県高校総体が五月二十七、二十八日にある。二十九、三十日は進路指導関係で県教育研修所に宿泊研修がある。六月一、二日は尼崎市へ情報交換および求人開拓の出張予定だった。六月三日（土）に書いて、翌日推敲をして送ろうと思ひ、返事を書かないまま先送りになっていた。

同じころ、『小田切秀雄全集』全十八巻別巻「回想の小田切秀雄」にエッセイを書けという手紙が、「小田切秀雄先生を囲む会」世話人の田中單之さんからあった。原稿締切は八月末日だった。これは夏休みに書けばよいと気軽にひき受けた。そのころにはなまげくせも治癒するだろうと思っていた。

ところが五月二十四日、「囲む会」の鶴見亨さんなどから、小田切先生の訃報がはいった。以前から病状がよくないということは聞かされていたが、とつとつそのときがきてしまった。六月四日が「お別れ会」という。翌朝の新聞に同意のことが報じられていた。わたしは迷った。東京へ行くには二泊三日はほしい。だがこの時期、出張続きで学校にいない日が多かった。時間割変更も限界にきていた。小田切先生には恩義があった。「お別れ会」に出向かないわけにはいかない。

ツーリストへ電話を入れて、東京一泊・神戸一泊のホテルを押さえた。六月三日の土曜日の午後には島を出発して、夕刻東京に着く。四日の会に出席し、最終の新幹線で神戸までもどり、五日の早朝洲本へ急いで勤務につく。その予定で上京した。三日の夜は知

り合いと夕食をともにし、四日も別の友人と昼食をとった。午後二時過ぎ、目黒区の五百羅漢寺へ着いた。

多くの顔見知りがあった。ほとんど会釈だけで、話はしなかった。だれもが沈痛な面持ちだった。「囲む会」の勝又浩・田中單之・鶴見亨さんたちが、裏方で小まめに立ち回っていた。わたしよりも遠い佐賀大学の浦田義和さんも来ていた。

無宗教による「お別れ会」だった。生花に飾られた祭壇に、小田切先生のはにかむような、かすかにほほえんだ遺影があった。司会は渡辺澄子さんと黒古一夫さんだった。渡辺さんは『文学的立場』創刊同人で、古くから業績に触れてはいた。そういえば同誌創刊同人の伊藤成彦さんのお別れのことばは格調高いものだった。黒古さんは「囲む会」の会員である。金石範さんのやや長く淡々とゆっくりとしたもの言いや、林京子さんの粛々と簡潔なお別れのことばも印象的だった。なによりも、次男統二さんの闘病生活の報告と、長男有一さんのお礼のあいさつがよかった。

献花をすませたとき、堀江さんに会った。「原稿頼みますよ」と言われた。「はい」と応えたが、わたしには時間がなかった。唯一の時間と思われたこの土曜、日曜日に上京した。それでも書く気持ちになればできないことではなかったが、なまけものは時間をつくるのが下手だ。ずるずると原稿はあと回しになった。

斎場を出ると、多くの人ばかりだった。数人とあいさつ程度の会話や黙礼をするだけ

だった。その場に長くいても、精進落としにはつき合えない。文芸家協会の伊藤愛子さんがいた。帰りかけると小原元教授の菁子お嬢さんが斎場から出てきた。三人で目黒駅へタクシーで出、寿司を食べて別れた。

菁子さんは小原先生の一人娘である。小原先生はわたしの媒酌人であるが、すでに夫妻ともに亡くなっている。小原先生の「お別れ会」にも、十周忌の「偲ぶ会」にも小田切先生が来られていた。小原先生の文学碑の文撰と揮毫は、ともに小田切先生だった。菁子さんが今日来られののもっともなことである。菁子さんに会うのは、三年前の母君の告別式以来だった。

帰島して六月下旬に「囲む会」の田中さんから、小田切先生を偲ぶ冊子を出すので、原稿を七月十五日までに送れとの連絡がはいった。進路関係のスケジュールと学期末の忙しいときである。「全集」に原稿を送る約束をしている。それと近い内容になるので困ったと思いながら、うちすてておいた。

一学期末に原稿がひとつ必要だった。淡路島の高等学校の国語科教員で出している『淡路の国語』という冊子がある。一号から三号までわたしが編集人だった。編集人の間はなにも書かなかった。今回は四号で、二年に一回の各校持ち回りとなって、編集が変わった。今回は教科主任でもあるので、書かないわけにはいかなかった。今書けるものは——「島の春」の連載を終えて——だった。堀江さんに送る内容と重なる。一学期末に十八枚

の原稿を『淡路の国語』へ送って、堀江さんへも田中さんへも送らなかつた。

「囲む会」の編集会議が七月三十日にあつたらしい。三十一日の夕方、鶴見さんからお叱りの電話がはいった。会員の原稿が少ない。もつと集めないと本にならない。八月十日ごろまでに送ってほしいとのことであつた。わたしは、うちすてておいたことをお詫びし、その夜、「幸せな出会い」と題して四枚を書いた。一日推敲に置いて、翌八月二日に発送した。散逸を防ぐため、挿し絵のはいつた新聞切り抜きのまま、印刷製本した私家版『鳥の春』の冊子を添えて送つた。後日、堀江さんの原稿と同日に着いた由の連絡をいただいた。速筆家の堀江さんも、わたしと同じく催促されて書いたのかと苦笑した。

八月に『農民文学』二五二号が送られてきた。南雲道雄さんが「小田切秀雄さんを悼む」、堀江さんが「わたしの唯一の土俵入り」として、追悼を掲載していた。ふと、わたしも書くべきだつたかと思つた。「囲む会」の立石伯さん（「お別れの会」では教え子代表でお別れのことばを述べる）が、『群像』七月号に「小田切秀雄の足跡」、勝又浩さんは『文学界』八月号に——「近代文学」派の思想的な幅——を書いていて、勝又さんは五月二十七日付の『神戸新聞』にも、「小田切秀雄氏を悼む」と題して一文を寄せている。

淡路島で少年の日々、小田切先生が中心となつて出版した雑誌『文学的立場』の定期講読をとおして先生を知り、当時先生が総長代行をしている大学へ行こうと、銀行を退社して上京した。以来三十五年、小田切先生に就いたといつて過言でない。そんな縁で

「困む会」は、大学の教授や文芸評論家、文学研究者を中心とした会であるが、許されて未熟なものの書きのわたしが加えていただいていた。もの書きで同会に顔出ししていたのは、ほかには久鬼高治さんくらいである。

小田切先生は震災の前年、拙著『田植え舞』の帯に推薦文を書いてくださった。「農民文学にして同時にあざやかな純文学だ、というのが、この短篇集を読むたのしさだ。作者は多年淡路島で高校教員をやっているひとだが、とつぷりと身を農村・農民のなかにつかせながら、土着の知識人としてその農村・農民をいわば下から照らしたして飽くことがない。……略……島をこえて日本の農村全体、日本人と人間そのものの生存・生命の問題に切実にかかわっていることが、具体的に新鮮な文学的表現となっているのだ。土着の目は、こういう広い場所にも達している」と。

その作品で農民文学賞を受賞したとき、先生はたいへんよろこんでくださった。教え子にやさしい面倒見のよい先生だった。阪神・淡路大震災のとき、二度も見舞状をいただいた。「いまテレビを見ているとあまりにもひどいので……」と、続けさまに頂戴した。もはや『農民文学』に追悼は、間に合わないが、「島の春」とその前後の雑感はんらんかの形でまとめておきたい。たいへんな出来事が絡んでいた。記憶の新しいうちにメモを取っておきたい。

てんやわんや

はじめに『日本農業新聞』から連載小説の話があったのは、一九九七（平成九）年五月だったと記憶する。のちに名古屋支店へ転勤する安達剛さんからだった。推薦は農文学賞を受賞したとき取材に見えた岡崎勇さんだとあとで聞いた。一九九八年十月から半年ということだった。与えられたテーマは「淡路島の農業と阪神淡路大震災」である。わたしのいちばん書きたいテーマだった。連載の苦勞をしないわたしは、いとも簡単に即座にお受けした。

てんやわんやの準備がはじまった。高等学校という忙しい職場に勤務しながら、新聞連載小説を書くなどというのは、そもそも無理があった。時間の確保がむづかしい。毎日原稿を書いたり構想を練ったりできない。長期休業中も補習や部活動で毎日のように職場へ出かけ、なかなか多忙である。授業と学校行事を縫うように、日曜日と土曜日に少しずつ時間を確保し、休業中に少しは書きためる以外にない。逆算してスケジュールを組んだ。

七月までに大まかな構想を練り、資料の収集項目と取材項目を整理する。夏休みから年内にかけて、あらかたの資料収集と取材を終える。翌一月から三月までに資料を読み、本格的な構想を立てる。舞台設定・人物設定・人物関係図の作成・年代や事件の考証な

どを一覧表にする。各プロットごとに小見出しをつけ、回数を配分する。四月末の連休から執筆にかかる。体調を崩さないことを心がけ、準備を開始した。

九七年八月に構想メモを簡単に新聞社に示して、部長局長会議で正式に依頼するとの連絡をいただいた。同年秋に上京して、編集者と打ち合せた。編集担当は杉崎治男文化部長だった。掲載の二週間前に原稿を送って、新聞社から挿し絵画家に原稿を送り、掲載五日前に挿し絵が届くという繰り返しになるらしい。わたしは仕事の関係で、毎日原稿を送ったりできないので、十回分か二十回分をまとめて送ることにした。ワープロの打ち出し原稿とフロッピーを添えて送る約束をした。

準備のほうは順調に進んだ。取材と資料収集はほぼ終わった。年末年始は、ゆっくりお酒を飲むゆとりもあった。正月帰省していたこどもたちに、島へ帰ってこいという話をする時間もあつた。東京の息子は三十歳まで待つてくれという。大阪の娘は二年間の会社勤めで疲れているようだった。三月に島へ帰ることに同意した。臨時の教員の口を探しておくことにした。

息子や娘が都会へもどつて、九八（平成十）年の松の内も終わりかけた。そろそろ資料の読みにかかろうとしていた。一月十二日から妻は北海道へ教育視察研修旅行に三日間旅立った。わたしは自炊を強いられた。学校ははじまっていた。十四日（水）三時間目の授業がはじまればかりだった。出席を取り終わった十時四十七分に緊急放送が入つ

た。「北原先生、至急職員室へおもどりください」と繰り返した。

わたしは、もう教室へもどれないと思って、教材と出席簿などをもって職員室へ帰った。学校では授業中の緊急放送は、よほどのことがないと考えられない。普通はだれかが呼びに来るものだ。一分一秒を争う出来事が起こったはずだ。とっさにわたしは妻の飛行機を思ったが、まだ飛び立つ時刻ではない。火事かと思いつながら職員室に帰ると、教頭が「近所のかたから電話で、自宅が火事だと言つことです。消防署にも確認しました。すぐに帰ってください」と言った。こていねいに確認済みだった。わたしは全焼を覚悟した。

わたしの家は水の便が悪い。昔は五百メートルほど離れた溜め池の水を、灌漑用水路を使って引いてくる以外になかった。火が出ると全焼だと、父から厳しく注意されていた。火元には細心の注意をはらう訓練を、小さいときからされていた。ガスの元栓やストープの電源確認など、わたし自身するか、妻や子どもに確認したかを尋ねるくらいだった。

現在は百五十メートルほど離れたところに消火栓がある。しかしホースは一本しかとれない。火事の発見から通報・消防車が来るまで十分、放水がはじまるまでに五分、初期消火の効果は終わっている。出火から十五分も経てば、火は止められない。類焼を食い止めるのがやっとである。元消防団員だったわたしにはよくわかっていた。

実は十数年前、職員会議中に、自宅が火事だという電話連絡がはいった。職員会議を中断して、わたしとほとんどの同僚たちが駆けつけた。そのとき国道まで来ると自宅方向で黒煙が見えた。しかし、どうみてもわたしの家の方向とは若干ずれている。目の錯覚かと思った。

近づくと七十メートルほど離れた近所の家だった。わたしは当時消防団員だった。ほつとする間もなく、消防服に着替えて消火作業にはいった。翌日からの片づけも手伝った。次々と駆けつける同僚は「よかったな」とも言えず、徐々に帰っていった。おそらく連絡をしてくれた人と、電話を受けた職員の間で行き違いがあったのだろう。今回は消防署に確認済みだった。

同僚が車で自宅へ送ってくれた。教頭が自分で運転するなど、車を準備していた。学校から国道に出たとき、自宅方向で煙の立ちのぼっているのが見えた。間違いなく我が家だった。煙が大きい。まだ燃えているようだ。「居間の電気ストーブを消し忘れたか」と思った。朝の洗面のおり、ガス栓は止めた記憶がある。朝食は食べなかった。煙草も吸わなかった。着替えるときに電気ストーブをつけたが、消した記憶がない。妻子とも不在だった。わたしの過失は蔽うべくもなかった。

消防関係者や近隣の者が数十人集まっていた。風がなかった。隣家への類焼は免れたようだった。離れの西座敷に火が入りかけて、食い止められていた。まだ燻っている箇

所へ放水して、西座敷を守っていた。西座敷はわたしの書斎だが、近年は書庫の機能しかなかった。屋敷入り口の通り門を兼ねる長屋は無事だった。風呂・便所・倉庫棟には火がまわりかけて止まっていた。

居宅の母屋は無残だった。屋根は抜け落ち、太い梁や桁が黒焦げだった。棟の瓦もすべて落下していた。どういいうわけか親父に申しわけないことをしたという思いが、ふいに湧いた。親父がやつとの思いで建てた母屋だった。三十年前に亡くなった親父の顔がよぎった。

居宅焼失でいちばん困ったのは、半年かけて集めた連載小説の資料だった。必ず返してほしいと、念押しされたものも多くあった。再度手にはいらないものもあった。資料集めのやり直しをする時間がなかった。連載はあきらめるほかないかと思った。

もうひとつ困ったのは住所録がなくなったことだった。普段は通勤用のバッグに入っているのだが、まだ新年で賀状を書いていた。過去二年分の賀状と今年の賀状、一年分の手紙・はがきなどが居間の電気炬燵の付近にあった。住所録もそこへ置いていた。三十年以上も丹念に書き加え、整理してきた住所録である。千人以上の住所録は、五十年生きてきた証でもある。その居間が出火場所と推定され、すさまじい燃えかただった。全国に散在する友人・知人・恩師・親族の住所と電話がまったくわからなくなった。同僚の運転で自宅にもどるとき、いちばんに思ったのは、連載資料と住所録のことだった。

これがいちばんこたえた。

万巻の書というが、実際一万余千冊の本があった。十代の終わりから三十数年買い続けた書籍だった。頂戴した本も多い。いまずが必要がなくても、将来ほしくなるときがあると思う本は手に入れていた。よい図書館がない田舎では、必要な本は自分で入手するほかないからである。

氣にいった作家の本はおもに母屋にあった。詩集、外国文学、美術書、比較的新しい本も母屋だった。後日整理すると、西座敷の書齋や和室で燃えないで、冠水せずに残った本は三千冊足らずだった。母屋やつなぎ部屋、西座敷の廊下や板の間に置いていたものは全滅だった。

わたし一代は家を建てる必要がないと思っていた。農地や山林を買って資産を増やそうという思いはなかった。とにかく借金をしないで、次の代へつなぐ役回りだと思つて気楽にいた。だからお金を貯えるという意識がなかった。島にもどつて働きだしてから、ずいぶん贅沢なお金の遣い方をしてきた。旅に出たいと思えば出かけた。ほしい本はすぐに買った。書画骨董に興味はないが、友人知人のものや、友人の画商に勧められたものを相当買った。油絵三十点あまり、掛け軸二十点あまり、パステル画やスケッチ・色紙も数十点、大皿・壺・茶碗などは百点くらいあったが。最近焼き物が好きになつて、ちよつと名のあるものもあった。それらもすべてなくしたが、泣きたくなるもので

はなかった。

妻が中学校の教頭になって四年になる。やっと公式の場所へ出る衣服がそろったところだったが止むを得ない。幸いことも自分たちのものは、それぞれ都会へもって出ていたから助かった。それでも片づけのとき、こともたちも帰っていて、焼跡から重機でピアノを吊り上げたとき、娘の細い悲鳴が聞こえた。

火事の日の午後から夕方まで、わたしは焼跡や通り門の長屋に立って、煙草を銜えていた。次々に訪れる見舞い客に、「ご心配をおかけします。わたしの不始末で」と同じ挨拶を繰り返した。親戚のものは明日からの片づけの相談や、手分けして挨拶回りをしていった。近隣の人が数十人の夕食の用意をしてくれる。同僚と生徒が西座敷の書齋で焼け残った書籍を、長屋の倉庫へ移動してくれた。

同級生と卒業生が長屋での仮住居の準備をしてくれる。長屋に八畳六畳と簡単な台所セツトがあつた。婆さんが住んでいたところだ。各家庭から余りものの食器や炊飯器・鍋類・食器棚・冷蔵庫・洗濯機・テレビ・電気ストーブ・当面必要な衣類や寝具などが次々と準備される。親しい電気屋が仮配線をしてくれた。ガス・水道のひき込みもすみ、夕方には夫婦で仮住居できるようになった。

ほとんど相談はない。それぞれの持ち場でふさわしい人が差配していた。わたしは、あさつを繰り返すことと、尋ねられると「よろしく頼みます」というだけだった。煙草

がぐつと増えた。「お前、火事の現場でよく煙草を吸えるな。不謹慎やで」と親しい友にたしなめられた。しかし、「することがないでえか」と笑いながら、おもむろに煙草を取り出すのだった。

妻が北海道から同行の職員とともに、家に帰ったのは夜八時ごろだった。わたしは北海道へ連絡を入れなかった。心配させるだけだと思っただからだが、市教育委員会が関係する研修旅行だった。そちらから連絡がはいった。近くの小学校長が携帯電話をもって飛んできた。いまこの携帯電話に妻から連絡がはいるとのことだった。

「もしもし、由美子です。火事って本当ですか」

落ち着いた妻の声が聞こえた。

「すまん。全焼ですわ。電気炬燵か電気ストーブらしいね。なにも出せない。まいりました」

「困ったねえ……。家具や衣類はしかたないけど、あの本と資料が弱ったねえ。いま、早い飛行機がないか調べてくれているの」

「予定どおり帰ってきたらええ。時間の変更は必要ない。落ち着かないだろうが、予定どおりのコースをみんなまで回って、片づけは明日以降だから」

夜になってもまだ十数人がいた。入れ替わり見舞い客が来る。長屋の通り門はこつた返っていた。そんななかへ、妻が同行の人たちと帰ってきた。「お世話になります」と言っ

て通り門にいる見舞い客にあいさつをしてまわった。電気で照らされた家を見て、妻は「ひどいねえ」と言つて、しばらく無残な姿を眺めた。火事そのものを見ていないので気丈夫だった。家族に泣き喚いたり、めそめそされるとたまらなかつたが、妻にも子どもたちにもそれはなかつた。唯一の救いだった。

娘が少し遅れて帰つてきた。島の友人から仕事中に連絡がはいつて、大阪のアパートへもどり、数日間の着替えを持つて帰つてきた。友人がフェリーまで車で迎えに来てくれたらしい。

息子は翌日午前中に帰つた。東京から深夜バスで大阪へ早朝着いた。妻だけでなく息子にも娘にも連絡をしなかつたというより、わたしはだれにも火災のことは自分から連絡をしなかつた。やがてだれかから伝わつていくだろうと考えていた。触れ回れることではなかつた。親族や島外の友人知人へもしらせなかつた。

火災の二日めの遅い夕食をしているときに娘がいつた。

「お父さん、春から帰るいうても、帰る家がなくなつて」

これには少々まいつた。

「心配するな。西座敷をいそいで補修して、そこにお前が住めるようにする。お父さんたちは長屋で住めるから。プレハブメーカーの家でよい。今年中には新しい家を建てるから、心配しなくてよい」

「おれも島へもどつたほうがええか」

心配そうに息子も尋ねた。大震災のときも東京にいた息子が、そういつて電話をしてきた。東京でふらふらしているようだ。が、生家のことは気にかけているらしい。

「いや、お前は家ができてからでよい。二人もの就職探しを同時にはむつかしい」

「お父さんみたいに火元に注意する人が、どうしたんでしようね」

妻が言った。二人のこどもがわたしの顔をみている。

「よくわからん。洗面のガスを消した覚えはあるが、パジャマを着替えるときにつけた電気ストーブを消した記憶がないね。まいった。まったくすまん」

わたしは自分の火の不始末と、後日判明したことであるが、淡路島で十六件の連続不審火がつづいた。泥棒が数十件発生している。窃盗団は島外から来ているという。明石海峡大橋が開通してから島は物騒になった。町内から注意のチラシが回ってきた。我が家もその一連の不審火のひとつだったらしい。犯人は五月になつて逮捕されたと聞くが、いまもつてどのような男が関心さえない。

火事の翌日、現場検証が済むと、母屋の焼け残りのなかから、使えるものを取り出す作業がはじまった。ほとんどだめだったが、玄関右の部屋は火のはいりかたが少なかつた。桐のタンスは熱と水で膨脹し、密封状態になった。ひきだしは固くてなかなか開けられない。裏からタンスを壊すと、妻の着物は全部助かっていた。娘の晴れ着も無事の

ようだった。すぐ洗濯に出せば大丈夫と、妻の同僚が洗濯屋へ運んだ。後日無事に返ってきた。わたしのもので厚み六寸の碁盤だけが助かった。

みなみおもて
南面の間にあった本箱の本はすべて黒く焦げていた。田舎の母屋は天井のうえに土天井があり、屋根土も多い。それらがどっさり焼けて抜け落ち、本箱の前に渦高く盛りあがっていた。本箱の下端は燃えていない。密封状態になっていた。わたしは妻の着物と同じ状態ではないかと思った。そのなかにアルバムが二十冊ほどはいつてる。手伝いの人に本箱の前の土砂を取りのぞいてもらった。

写真は大事に整理していた。わたしはフェルアルバムの台紙を、三十枚か四十枚に増やして分厚いアルバムにしている。二十代後半に少年時代からの写真を整理した。その後は三年くらいで一冊になっている。それらが十数冊あった。多少焦けているものもあるが、写真そのものはほとんどが無事だった。時間をかけて整理し直せば、なんとかなりそうだった。なかばあきらめていただけに、ありがたかった。

出火元とみられる居間の焼けかたはすさまじかった。新調した連載資料用の本箱を壁面に置いていたが、形もないほど燃え尽きていた。資料も構想メモもまったく残っていなかった。一年に約千枚の賀状を束ねたのが、燃えさしで残っているものがあつた。過去二年分と、今年のもの三束あつた。字の判読できるものは段ボール箱に入れて、パソコンの上手な教え子に渡した。住所録の復元のためである。三十年使ってきた住所録

は跡形もなかった。

二か月近くかかってほぼ復元してくれた。このうえに来年、再来年の賀状や手紙によって補充していく以外になかった。相手から手紙やはがきが来ないと、こちらからは連絡の取りようがなくなつたが、しばらくはいたしかたない。

消防団員、町内会の人、同級生、卒業生、同僚・親族などが、取り出しや掃除などをしてくれた。地震のときも思ったが、田舎の消防団や町内会、近所の手助けは大きい。連載小説の構想のなかに入れるつもりのことだったが、身に染みて感じいった。

火事の翌々日から火事場跡にコンボなどの重機がはいつて片づけがはじまつた。やはり五十人ほどが手伝つてくれた。焼け残りの木材は、近くの自家の田圃へ重機で吊つて、トラックで運び、野焼きした。

木切れや瓦屑の混ざつた土砂は、業者に産業廃棄物として処分してもらつた。膨大な瓦は近くの田圃に大穴を掘つて、深く埋めることにした。火事で焼け残つた木材が大量だった。柱などは燃えていても表面だけである。ひと抱え、ふた抱えもある梁・桁などの上具材はなかなか燃え尽きなかつた。昼間は多くの人が手伝つてくれるが、夜の火の番は家族でしなくてはならない。少量になつてからも燻りつづけ、煙が昇らなくなるのに一週間ほどかかつた。

野焼き二晩めは火事から四日めで、体力が消耗していた。午後から濱口隆義さんが来

てくれていた。夕食を一緒に食べてから、火の番をしてやるうといつて、一晚寝ずの晩をしてくれた。これはほんとうにありがたかった。濱口さんは『文芸淡路』創刊同人で、『文学界』新人賞を受賞した注目の若手作家である。彼がはじめて我が家を訪ねたのは、彼が十九歳のときだった。すでに二十年のつき合いである。その晩わたしは久しぶりに熟睡した。

一月十六日の午後だった。『日本農業新聞』の杉崎部長から電話がはいった。早くも知られてしまったかと思いつながら電話に出た。正直に話して連載執筆の件は断ろうかと思つた。杉崎部長が話した。

「もしもし、まことに勝手なお願ひですが、前任のかたの連載が長くなって、次のかたの連載が四月からになったんです。これは年内に完結していただいて、北原先生の連載開始を十月一日から三か月遅らせていただいて、来年一月一日から、一年間というのではいかがでしょうか」

わたしは耳を疑つた。僥倖とはこのことかと思つた。三か月連載開始が遅くなるなら、資料を春までに集め直して、構想を練り直し、五月か六月に草稿にとり掛かるとなるとかなると閃いた。半年連載が一年間となった。負担は大きいが、いまの状況では収入が増えるのもありがたい。即座に「結構です」と言つてしまった。このあと家の再建にはたいへんなエネルギーを消耗させた。三か月延期くらいでは回復できないものだった。

さてこそ、はじめたが

二月から三月にかけて、昨年集めた資料を集め直した。もう手にはいらぬものもあつた。返してほしいと言われていた人へは詫び状も出した。だが、ほとんどの人は、火事見舞いを添えて、手持ちの資料を再び提供してくれた。資料の焼失でお叱りは受けなかつた。ありがたかつた。

火災にあつたが、昨年夏からの取材ノートは、いつも通勤用のバッグにはいつていたので助かつた。舞台設定付近の地形や伝統行事・交通機関・農業形態・町の様子などをメモしていた。多くの人に会つた。歴史や事件など年代的考証は同僚や元同僚に教わつた。伝統芸能・行事も同様だつた。

高校の同級生が実にありがたかつた。よく同窓会をしているので、気やすく取材と資料提供を頼めた。神戸の避難所だつた小学校の教員、倒壊アパートから着のみ着のまま難を逃れた人、神戸市の対策本部詰めだつた人、神戸市水道局勤務の人、被災者が次々と運びこまれた病院の医師、神戸市内の銀行員、神戸市内の土建・建築関係者、県農政担当者、県教育行政担当者、ボランティア体験者、島内市町職員、ホテル経営者、農民、商業者など、多くの人の実体験を取材できた。教え子からも多岐にわたつて話を聞いた。これらの取材メモが無事だつた。

さらに、わたしの手持ちに秘密兵器があった。それは震災の日から約二週間、毎日丹念に書いた日記風のメモである。いまひとつは、震災の年の春までの三か月間に、震災に関する思いをエッセイ風に十数本書いた原稿である。続く余震に震えながらも、わたしは生涯でとんでもないものに遭遇したという思いが強く、時間があつたらワープロの前に座つてメモをとつた。

これは「事件はなんらかの形で再現可能であるが、そのときあなたはなにを考え、どのようなことを思ったか」という心情の再現は不可能である。そして心情の記憶は遠のく」というわたしのいちずな思いからである。

テレビニュースを観て思ったことや考えたこと、人と会つて話をして思ったことや考えたことなどを、震災のことについては丹念にメモをとつた。この生の感じなまたことを綴つたものがなかつたら、連載執筆の話があつたとき、いくら蛮勇を奮つてもひき受けられなかつたかもしれない。

フロッピーはすべて焼失した。一箇所に置いていたワープロもダメにした。しかし、プリントアウトしてコピーをとつて袋に入れ、離れの書斎の棚に置いていた。これが全部無事だった。他の未発表原稿も、ほとんどプリントアウトしていたから、フロッピーはなくなつたが、文字は残つた。落胆は薄らいだ。

さて、てんやわんやで準備をはじめたが、居宅焼失事件で、さらにてんやわんやとなつ

てしまった。学校勤務・居宅再建・連載の再準備と、時間がいくらあっても足りない情況がづづいた。時間がどんどん過ぎていく。一月末には長屋での仮住居に少し慣れてきたが、まだ資料収集には取りかかれないうでいた。

西座敷の書齋と和室の修復工事が二月はじめに完了した。友人や教え子に手伝ってもらって、焼け残った本を一冊一冊ていねいに拭きながら、書架に収めた。なんと書籍の少なくなったことかと思つた。二十代のときよりも少ない本の数である。十六畳ほどの書齋のはめ込みの書架に、こじんまりと収まつてしまった。

書齋の修復工事が終わると、本格的に連載小説の準備にはいる態勢ができた。資料提供者に電話や手紙を書いて、再度貸してもらう段取りにかかった。人物関係図や舞台設定の具体化をはかった。構成のメモどりははじめた。年代考証一覧のメモを作った。作中時間の推移を一覧表にした。

長屋で八時ごろ夕食をすませると、書齋に三、四時間もつた。長丁場なので午前一時は超えないように心がけた。気がつくと午前二時、三時になつてゐることもあつたが、連続は避けた。体調を崩してはもともともないと言ひ聞かせていた。

三月はじめ、住所録の復元を頼んでいた教え子から、ほぼ完成した連絡をもらった。焼け残りの郵便物以外に、各種名簿を使って追加してもらつた。とくに火事見舞いを頂戴した人の名簿完成を急いでもらつた。三月中旬、やっと千二百人ほどの火事見舞いの礼

状を発送できた。発送事務は親しい同級生が手分けしてやってくれた。こうして思い出しているとき、火事の時、ほんとうにお世話になったかたが多い。なんらかの形で生涯かけて返礼していきたいものである。

同じころ、徳島と神戸の住宅公園へ何回か足を運び、島内のモデルハウスを何箇所か見て歩いた。見れば見るほど大手メーカーのプレハブ住宅がいやになってくる。鉄筋はもともと建てる気持ちはなかった。木造建築に大きく傾斜した。

三月から五月にかけて、わたしは手書きの図面を何回も何回もひき直した。それをもとに、六月から正式に業者が建築設計にとりかかった。間取りはわたしが手書きしたものに、強度や用材を考えて手を加えてもらった。見積もりが七月中旬にできた。折衝を繰り返し、八月中旬業者と契約し、十月から着工した。

連載小説のことを知っていた小田切先生から、三月ごろご注意のしがきをいただいた。独特の字である。何回いただいても、一度ですんなり読解しにくい字だが、判読のたのしみもある。「家を新築するのに、それにいれあげてだめになった人が、ぼくの知人にいるから注意しなさい」という内容だった。時宜を得たものだった。ありがたかった。このままでは駄目になると思ったとき、その後なんども自戒の書とした。

三月下旬に娘が大阪からひきあげてきた。西座敷の書斎と和室は娘に開放した。来客のあるときは書斎を使うが、それ以外は二部屋とも娘の自由にした。妻と長屋に住んだ。

わたしは電気をつけて遅くまで起きていることが多い。妻が早く寝られるように部屋をわけた。奥の間を仕事部屋兼寝室とし、手前の部屋を妻の部屋兼共同の居間とした。

四月から妻は学校現場を離れ教育委員会勤務となった。教育行政はいまや勤務時間はエンドレスだった。責任の重い部署にいた。夕食時に帰ることはほとんどない。わたしも第二学年に進んで忙しかった。

娘が臨任教員として勤務しはじめた。これは定時に帰ってくる。夕食の当番をひき受けてくれた。娘の手料理を娘と二人で食べることが多くなった。五十歳を過ぎてこんな果報があるうとは思ってもみなかった。

奥の間に机と椅子を新調した。わたしにとっては、少々贅沢なものを買った。書架とスチール製二十段の書類整理ケースを買った。集め直した資料やメモをその二つにわけ置き、すぐになんでもひき出しやすくした。

以降九九（平成十一）年七月まで一年六か月、『島の春』の構想練りから大部分の原稿をここで書いた。島へ帰らずに東京に居たら、これくらいの広さのアパートにいまも住んでいるであろうと、東京時代の下宿やアパートをなつかしみながら書いた。震災の仮設住宅の人を思いながら書いた。狭く不自由な生活が苦にならなかった。新居が完成し、娘が二階の自室に移って、書斎をわたしが使いだしたのは九九年の夏休みからだ。震災場面の「大地が裂けて」からの百二十回分を書斎で書いた。

ねらったものは

九八（平成十）年にもどるが、火事のあと資料の再収集と読みは進んだが、結局夏休みまで草稿はまったくできなかった。八月下旬に編集者と会う予定だった。それまでにとれだけ書けるかが勝負だった。まったく書けなかったら、急遽辞退も視野に入れなくてはならない。一学期末の成績処理が終わると、小説世界に没頭するようにつとめた。しかし、前半は補習と吹奏楽部・バスケット部の部活動で消えた。

長編小説には若干自信があった。震災の前年、「新大久保界限」という三百五十枚の作品をひと夏で書いた。ワープロだった。あの原稿の約二倍を念頭においた。なんとか書けるだろうという思いはあった。

新大久保は淡路島出身の作家、岩野泡鳴が住んでいた新宿区西大久保の、山手線の駅名である。わたしが二十歳で東京へ出たとき、最初にアパートを借りて住んだところである。地形がよくわかっていたから舞台に使った。

時代は現代の東京である。やや中間小説風のもだった。ちなみにわたしが次に引つ越した先は、文京区目白台の雑司が谷である。雑司が谷墓地には文学者の墓が多いが、岩野泡鳴の墓碑もあるからだった。

夏休みにはいると、忙しいといっても授業がない気楽さで、創作の世界に集中できた。

時間があればワープロに向かい、メモを眺めた。書き出しをずいぶん迷ったが、小説の中心的人物たちである四夫婦の人物紹介に相当する「祭り見物」からはじめた。普通の小説スタイルではない。小集団の描写からはじめた。近隣の家で、ほぼ同年輩で、仲良しでもある四夫婦を小説の主人公に設定した。小説というより映像的、ドラマ的手法をとった。会話による展開を意識した。

島の春は、春祭りにはじまる。

どこからともなく太鼓の音が聞こえてきて、島の

春の到来を告げる。やわらかい陽ざしに、よもぎ・

つくしが芽吹きだす。

「トトンガ トントン トトンガ トン……」

獅子舞の太鼓である。

腹を決めて、こう書き出すと、あとはほとんどん書いていった。書きながら人物像を確かなものに作りあげていった。数枚書くと登場人物たちが、想像のなかで自在に動きはじめた。プロットごとに小見出しをつけ、これを何回でどのように書くかと展開を練っていたので、書き出すと意外に描写が進んだ。次の三点はとくに留意した。

島の農業を描くには、島の総体を描くなかでしか表現できない。総体とはなにか。そこに住む人びととその人間関係のありかたに、伝統や習俗がどのように絡んでいるかを

解明していく。小さな地域社会を描くことで、島全体の人間模様を表現し、それが日本各地の地域社会のどこにでもあるものとして普遍化する。

農業のあり方を考える。大規模専業農家はいまの日本の農業を支えていない。兼業農家が支えている。大規模経営は日本の農業を行き詰まらせる。化学肥料と農薬の多量使用や大型農業機械によつて粗放農業となり、日本の農地を荒廃せしむる危険性をもつ。煩わしい村社会が、どのように人間的社會であるかを描くことで、農村で生きていこうとする人びとに光明となるような描き方をしたい。都市住民との対比が大切である。

明石海峡大橋の開通と大震災は、ある面では人間関係を追い詰め、切り裂いたが、やがてこれらも島の自然と村社会が救済し浄化していく。悪人はいない。温かい人間関係が崩れても、いつとぎのことで、やがて修復され飛翔や昇華さえ可能である。

そのようなことを思いながら、連載のイメージをふくらませていった。書き悩んだときは、この三点のところにもどつて考えた。以降何回も立ち止まって想を練つた。九八年八月の終わりに上京するとき、草稿で二百枚は超えていた。完成原稿も連載一か月分ほどできていた。自信をもって上京できた。

今回の上京は編集担当者に進捗情況の報告と、挿し絵画家の決定だった。進捗情況は会食をしながら、少しアルコールもはいつての報告ですんだが、挿し絵は実際のスケッチやデッサンを見ないと決められない。新聞社推薦の挿し絵画家はいるが、わたしの推

薦する人でもよいとのことだった。推薦したい絵描きが二人いた。ひとりは東京在住で、ひとりは淡路島在住だった。

上京した日、東京で絵を描いている友人の家に泊まった。わたしが二十歳で受験に上京したとき、「市が谷ユースホステル」で同室だったN君である。N君は十八歳で山口県から東京芸大を受験にきた。同宿に詩を書きながら哲学をやりたいと、岐阜県から受験にきていたA君がいた。この三人が意気投合した。東京でもっとも親しい仲間となった。大学を越えて、三人を介して、東京での人間関係が加速的に増えていった。長いつき合いです。

N君はいい絵を描き続けている。わたしたちが東京で同人誌を出したときは、表紙や挿し絵を描いてもらった。最近抽象画をやりはじめているが、N君の絵は具象が実にいい。相変わらず貧乏である。A君はある出版社の企画部次長兼編集長である。月刊文芸誌の編集者だった奥さんと早々に結婚して、千葉で二度目の家を建てた。われわれ三人のなかでは、A君がもっともゆとりのある生活をしている。上京すると、ときどき三人で会う。最近A君は川魚釣りに凝って、上京のときは早めに連絡しないとつかまらないことがたびたびあった。N君までがスケッチのために魚釣りについて行って、二人とも不在のこともあった。

N君宅に泊まって、二、三枚のデッサンをもらった。新聞社に見せるためである。経

歴はわたしが知っている。不足はない。都合で挿し絵を頼むといったが、わたしには迷いがあった。N君に頼めば、新聞社推薦の挿し絵画家と同じである。淡路島の風物のこと、震災のこと、農業のこと、島の伝統芸能のことなどをまったく知らない。新聞社の部長・局長に絵を見せると、よい絵だと誉めN君でオーケーがでた。最終は会議で決定するが、問題はないでしょうとのことだった。正式には少し考えさせてほしい旨を伝えて帰島した。

迷った末に、わたしの最初の本で自費出版したとき、装丁をひき受けてくれた前川和昭さんに依頼した。連載が終わってみると、前川さんに頼んで正解だった。前川さんは取材とスケッチにどこまでも出かけ、一年間描き続けてくれた。これはN君では無理である。取材先でばったり会うこともあった。文章より挿し絵のほつがよいといってくる失敬な友人もいたが、わたしはにんまりしていた。

連載が終わって、今年の五月に「島の春」の原画展をやった。壮観だった。淡路文化史料館の展示場に、一枚一枚額装してならべると、新聞挿し絵では味わえないよさがあった。わたしも数点わけてもらった。

九九（平成十一）年一月一日から連載がはじまった。実際に連載がはじまると、一年間は長かった。まとまった時間の捻出に苦労した。だから、まとまった時間の捻出をあきらめた。夕食後は毎日長屋の奥の部屋に数時間籠るのを日課とした。平日は草稿を書

き続ける。粗いメモ風のところがあつてもよい。金曜日か土曜日の夜に、ゆっくりと推敲しながら手直しをする。日曜日や祭日にプリントアウトして一週間置いておく。次回再推敲する。その時点で、下読みを頼んでいる小説の好きの教え子に渡す。三、四日で返ってくる。それを見直して手を加え、送付原稿とする。その繰り返しだった。

なかなか構想どおり書けないものである。短いプロットの予定が長くなる。二十回分以上になると思っていたものが十数回で終わる。同年の春から夏にかけてが、いちばん苦しかった。春から夏は建築中の家の内装の素材や色合いを、細部にわたって決めていかなくてはならない時期だった。夏前に息切れがした。ストックが残り少なくなった。夏休みまでひき伸ばすのに四苦八苦した。

「収穫」「年のはじめ」という震災前の島の秋から、年末年始の描写をことさらゆつたりとひつ張った。その次にくる震災のことは、夏休みに一気に書きたかったからだ。ゆつたりひつ張るなかで、これこそ天変地異の前の静けさだと自分に言い聞かせた。この平穏さが島のありようで、いつまでも続くものでなくてはならないものだ。島の総体の表現にはふさわしいとさえ思っていた。

夏休みにはいった。「大地が裂けて」と題して、震災当日の朝から書き出して 然とした。書こうと温めていたものが、溢れ出てくる。こんなにも自分のなかにたまっていたのかと驚いた。慌てて残りの回数をカウントした。あと百二十回だった。四百字詰め原

稿用紙にして約二百八十枚である。紙面が足りないのは明らかだった。

構想一覧表を見た。残りのプロットは十一話あった。どうみても一プロットを十回前後で書けるわけがない。せめてあと三十回以上はほしかった。新聞社に掛け合うほかに。不転のつもりで上京した。連載を一月延長、二月でもよい。なんとかならぬいか頼むためである。

帰宅して五日めに連絡がはいった。わたしの後任は売れっ子作家の北方謙三である。すでに連載準備にはいつている。今年の三月から文化部長は大塚憲治さんに替わっていた。その大塚さんからだった。

「三月延長して三月末までなら話はできるが、一か月、二月の延長は、北方謙三さんに失礼で話をもっていけない。一月のちようど二〇〇〇年から開始か、もしくは四月の二〇〇〇年度の、節目から連載を開始するのぞないと駄目だというのが、部長局長会議の意見です」とのことだった。もつともなことである。

今年の十一月にはすべて書き終えたかった。年内書き続けるのは困難だった。ましてや年明けてまで書く時間的なゆとりは学校のなかになかった。わたしは第三学年の主任だった。受験生を抱える秋はたいへんである。とりわけ国語の教師は、志望理由書・自己推薦書・小論文などの添削に明け暮れる。面接指導も相当のエネルギーを要する。三月延長可はうれしかぎりだが、当方に受け入れる余裕はなかった。躰がもたない。圧

縮して完結する旨を伝えて、構想を練りなおした。

十一のプロットを八つにまとめた。ひとつは会話のなかに吸収して、七プロットとした。「大地が裂けて」はまだよかつが、「達夫の奮闘」以降は説明部分を抑えた。そのため展開に粗いところが多かった。流れに飛躍が多かったのは否めない。取材していた神戸・阪神間の震災の状況描写が薄められた。淡路と神戸の避難所の違いを描こうと思っていたが無理があつた。被災地にもほのぼののとしたいい話がたくさんあつたが、これらも多きは割愛した。

わたしはこの作品である実験をした。個人を描くのではなく、小集団を描くことである。村の共同体の人びと・親族・友人・同級生・職場などの小集団を、対等の関係で描くことに標準をしばつた。群衆とか民衆とか市民を主人公にする力量はないが、小集団を主人公とする小説作法は可能ではないかと思つていた。

それは『田植え舞』でも一部実験済みだつた。それをより進化させようと思つていた。実験はおおむね成功した。だから小集団の主人公たちを、もっと「島の春」らしいところまで連れていきたかつた。しかし、紙面の関係から最終部分で一夫婦の春を描くところにとどまつた。

島の春が本格的にもどつてくるところまで、割れた水田に早苗が植えられるところまで、花の栽培農家や牛飼いが立ち直るまで、神戸や芦屋の被災地がもっと復興するところ

るまで描きたかった。当初ねらっていた農村部と都市部の人びとの対比が薄らいだ。これらは別作にゆだねる以外にない。なにはともあれ、体調を崩すことなく、一回も休載することなく終えられた。最終稿ができたのは昨年十一月末だった。足掛け三年間の重圧から解放されて、ほっとしたものである。

ふりかえると、よい機会に恵まれたものだと思う。実は作品中の「三つの海」と、その次の「帰郷」は震災前に書いた。主人公のひとり大滝賢太郎が、神戸から妻子とともに島へ帰郷して、春にレストランを開店する予定のところまで書いていた。作中の大滝一族は北淡路を中心に住んでいる。ところが作中時間と作中舞台がまったく同じところで、現実の世界に大異変が生じた。九五年一月十七日の阪神・淡路大震災である。わたしはあわてた。予想外の出来事が起こった。わたしは自分の作中人物たちを動かさなくなった。現実世界の重たさに、手の打ちようがなくなつたのである。

九六年二月の『農民文学』一三六号に、「地震で、作中人物は今…」と題してエッセイを書いた。この登場人物たちに、そのような災難が待ち受けているとは思ってもいなかつたわたしは、続編を書けなくて困り果てているということを書いた。手詰まりの閉塞状況を打破するきっかけとなつたのは、『日本農業新聞』からの連載小説の話だった。

わたしはこの機会に、わたしの作中人物たちを、震災の渦中からめて動かしてみようとう決心した。約七〇〇枚あれば、なんとかなるだろうと考えた。「三つの海」も、「帰郷」

も大胆に手を加え、『鳥の春』の全体構想のなかにとりこみ、よみがえらせた。実質二年がかりで、やっと完結できた。ありがたい機会を与えていただいた。しるしてお礼としたい。

2000（平12）年8月30日

あとがき

わたしの書くものは、すべて島からの手紙である。とりわけ小説以外のものは、そういうふうには強く意識している。わたしが生まれ、育ち、在住する島が淡路島だからである。かつて淡路島は船に乗る以外に、他との交流はなかった。孤島であった。明石海峡に橋は架かったが、わたしの淡路島のイメージは、島の果て、孤島である。意識的に都市と距離をおいて住んで久しい。そしてこの島から小説や詩やエッセイの形で、各地に散在する友人や知人に、わたしの思いを送りつづけてきた。この作業はこれからもつづけるつもりである。

この本はエッセイ集というよりも、雑多なものを集めた一巻である。いままで書いてきたものの散逸を防ぐためにまとめた。数年前に出版しようとして、自分で書いてきたもの

を整理しはじめたが、ほぼできたところで自宅の焼失があった。ふたたび集めなおした。記憶を頼りに、焼失した原稿を探した。わたしの書いたものを持っていそうな人に依頼して提供を受けたりしたが、いまもいくつか不明である。現段階ではこれ以上の原稿探しは困難とあきらめた。

ここには三十歳からの二十五年間のものが収録されている。生徒向けに書いたものは、多くを割愛した。編集者の意向である。掲載は項目別にし、同一項目では執筆順ではなく、発表の新しい年代順に並べた。同年のものは月順とした。未発表のものは項目ごとの後尾へまわした。手元にあるもので、二十世紀に書いたものはほとんど収録できた。また、この集に時どき妻子のことがでてくるが、「なんの因果で島流し」と言って、妻が島に住むようになって三十周年にあたる。ひとつの節目でもある。

こうしてならべてみると、はずかしいものもあるが、これがわたし自身なのだから、できるだけ手を加えずに掲載した。ずいぶん書いてきたものだと思うが、四半世紀もかかってこれだけかと思うと、さみしくもある。この機会を逃すとまとめる時期を逸することになると思い踏み切った。初出一覧をながめていて気づいたことであるが、この集に執筆の少ない年代は、小説のほうが中心になっている時期である。こうしてまとめてみると、自分の軌跡を距離をおいてながめられる利便さがあるものだ。

当初、大阪の出版社で話がまとまっていたが、原稿を焼失して頓挫した。集めなおし

て大阪へもって行くこととしていた昨年の夏、古くからの文学仲間である片倉啓文さんが、出版事業を起こした。長いつき合いです。出版社旗揚げの祝儀がわりに、片倉さんに出版を依頼した。はじめて起こした出版社の本にしては、よくやってくれたと感謝している。松香堂FSS企画の繁栄を祈るものである。

もの書きを意識して三十五年になる。新聞連載小説『島の春』を昨年末に出版した。いまこの集を出版して、二十世紀のわたしの仕事はいちおうの集成というか、区切りがついた。あとどれくらいの歳月、書きつづけられるのかわからないが、これからの励みとしたい。

二 一年一月

北原文雄

新装版あとがき

本著は二十世紀に書いたものの散逸をふせぐために、二〇〇一年二月に「初版」を出したが、出版を急いだために誤植が多く、「改訂版」を同年四月に出した。しかし、両版ともに少数数だったので、手許にまったくなくなってしまう。なにかの機会にさしあげたいと思っても、応えられなくて不自由をしていた。エッセイ集というよりも、雑多なものの寄せ集めではあるが、そのときどきのわたしの忘れがたい思いが籠もっている。手許にないのは寂しいかぎりなので、また少数数であるが「新装版」として出すことにした。何人かに教示いただいた箇所を訂正し、新たに見つけ出した「約束」を収録できた。あと何年書くことができるのかしれないが、二十一世紀の集もいずれ出したいものである。

二〇〇三年四月著者

初出一覧 編年体

初出一覧

- 三つの死
教師三年如月
正月雑感
『島の構図』あとがき
約束
十年の後
青山順三氏を悼む
一人芝居「身世打鈴」淡路島公演のこと
泡鳴の碑
劇団ともしび会 三年目の公演
淡路島の「食を考える会」のこと
『さんまにて』を読んで
84夏 淡路島の現状
『文芸淡路』10号
『それぞれの愛』を読んで
- 30歳 1975 (昭50) 年8月30日 『文芸淡路』 2号
31歳 1976 (昭51) 年2月 『足跡』 創刊号 志知高校生徒会誌
34歳 1979 (昭54) 年2月25日 『足跡』 4号 志知高校生徒会誌
36歳 1981 (昭56) 年6月8日 『島の構図』
37歳 1982 (昭57) 年5月8日 『MY BOOK』 4号
37歳 1982 (昭57) 年7月8日 『文芸淡路』 4号
38歳 1983 (昭58) 年1月25日 『文芸淡路』 6号
1983 (昭58) 年1月25日 『文芸淡路』 6号
1983 (昭58) 年7月15日 『文芸淡路』 7号
1983 (昭58) 年12月15日 『文芸淡路』 8号
39歳 1984 (昭59) 年6月20日 『文芸淡路』 9号
1984 (昭59) 年6月20日 『文芸淡路』 9号
1984 (昭59) 年12月25日 『兵庫のへん』 24号
40歳 1985 (昭60) 年2月1日 『関西文学』 252号
1985 (昭60) 年5月10日 『文芸淡路』 11号

鄭貴文さんのこと・平上すゑ子さんのこと

41歳 1986(昭61)年9月6日『文芸淡路』13号

同人誌の神様のこと

42歳 1987(昭62)年11月20日『文芸淡路』14号

『スケッチ・ノート』あとがき

48歳 1993(平5)年7月20日『スケッチ・ノート』

待ちに待った著作集

1993(平5)年7月1日『文芸淡路』18号

古い『スケッチ・ノート』

1993(平5)年10月5日『半どん』125号

『中国の食卓』(茶余閑話)

1993(平5)年12月1日『兵庫のペン』47号

島の果てから

49歳 1994(平6)年2月1日『田植え舞』

常陸寺山

1994(平6)年6月29日『産経新聞』ひょうこ随筆欄

淡路島からの手紙

1994(平6)年8月25日『農民文字』230号

二十年の歳月

1994(平6)年10月15日『文芸淡路』20号

三度目の同窓会

1994(平6)年11月11日『志知20年』

志知高校創立20周年記念誌

手相酒場のご託宣

1994(平6)年11月20日『天地会』洲本高校第16期生

卒業30周年記念誌

上京して

50歳 1995(平7)年2月13日 未発表

問われているもの

1995(平7)年2月13日 未発表

歯牙にも懸けたくないが

1995(平7)年2月14日 未発表

初出一覧

見えるもの	1995(平7)年2月20日	未発表
危機管理	1995(平7)年2月20日	未発表
このころの思ふこと	1995(平7)年2月22日	未発表
都市で生きる	1995(平7)年2月24日	未発表
今朝のこと	1995(平7)年2月	未発表
地震のあとに	1995(平7)年4月25日	『農民文学』233号
島の祭り	1995(平7)年5月25日	『東京新聞』文化欄
地震の朝	1995(平7)年7月8日	『日本文学誌要』52号 法政大学国文学會誌
淡路島の複合経営	1995(平7)年8月23日	『日本農業新聞』時評欄
食豊かな国・韓国	1995(平7)年10月25日	『日本農業新聞』文化欄
韓国を旅して	1995(平7)年11月2日	『信濃毎日新聞』文化欄 『農民文学』それぞれの視野2
ほつとくつろぐ紙面に動かされて	1995(平7)年12月3日	『神戸新聞』紙面批評欄
情報は氾濫しているのだが…	1995(平7)年12月10日	『神戸新聞』紙面批評欄
農家の切実な声にも焦点を	1995(平7)年12月17日	『神戸新聞』紙面批評欄
介護アンケートの意味するものは?	1995(平7)年12月24日	『神戸新聞』紙面批評欄

出会いと節目

地震で、作中人物は今：

地震とタバコ

韓国紀行

転換期に在学して

出会いの人

震災で淡路島は

島の春・小諸の春

海を超える

橋を渡る

島人の嘆き

下駄をなくす

海を見たい

朋来たりなば

家を建てる

「島の春」と、その前後

51歳 1996（平8）年1月15日、『文芸淡路』21号

1996（平8）年2月25日、『農民文学』236号

1996（平8）年7月5日、『半どん』129号・130号合併号

1996（平8）年12月20日、『文芸淡路』22号

52歳 1997（平9）年1月20日、『洲高育友会報』31号 洲高小史欄

1997（平9）年12月1日、『鄭承博著作集第5巻
奪われた言葉』解説

53歳 1998（平10）年2月20日、『全国農業新聞』農声欄

1998（平10）年5月23日、『信濃毎日新聞』文化欄

1998（平10）年5月21日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年6月5日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年6月20日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年7月7日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年7月23日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年8月7日、『神戸新聞』随想欄

1998（平10）年8月22日、『神戸新聞』随想欄

55歳 2000（平12）年8月30日 未発表

- 「島の春」の連載を終えて
目黒の弧影
2000（平12）年9月1日『淡路の国語』4号
- 『島の春』あとがき
2000（平12）年11月20日『小田切秀雄全集 別巻』
追想の小田切秀雄
- 『島の春』
2000（平12）年12月11日『島の春』
- 『私たちの見た小田切秀雄の思想と文学の五十年』
2001（平13）年1月刊行予定

きたはらふみお

北原文雄

1945年 淡路島の現住所に生まれる。
 1973年 文芸淡路同人会設立、同会代表
 1995年 『田植え舞』にて第38回農民文学賞受賞
 2001年 『島の春』にて第30回ブルーメール賞受賞
 著書 小説集 『島の構図』(1981年)
 詩篇集 『スケッチ・ノート』(1993年)
 小説集 『田植え舞』(1994年)
 長編小説 『島の春』(2000年)
 県立高等学校教諭
 兵庫県洲本市下内膳272-2に在住(〒656-0016)

島からの手紙

二〇〇一年二月二十三日 初版第一刷発行
 二〇〇一年四月五日 改訂版第一刷発行
 二〇〇三年四月二十五日 新装版第一刷発行

著者 北原文雄
 装幀者 松香堂FSS企画
 発行者 片倉啓文
 松香堂FSS企画

製印 兵庫県三原郡南淡町福良甲一五三
 本刷 電話(〇七九九)五三一三三七
 中西印刷株式会社
 電話(〇七九九)五三一三三七
 中西印刷株式会社

ISBN4-87974-011-X C0095